

はじめに

東北大学は、1907年（明治40年）の建学以来、一世紀以上の歴史を有する総合大学として、「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念を掲げて優れた人材を輩出し、数多くの研究成果を世に送り出してきました。

現在、私達は東日本大震災での被災経験をはじめ、産業収益力の低下や少子高齢化、グローバル化に伴う国際競争の激化、地球規模の環境問題など、多くの課題に直面しています。このようなグローバルでかつ混沌とした状況の中、大学の知に、東北大学に何が求められているでしょうか。私は総長就任時に掲げた「ワールドクラスへの飛躍」と「復興・新生の先導」という2つの目標を東北大学の多彩な力を結集することにより確実に達成し、新しい東北大学の姿を切り拓いていきます。



ワールドクラスへの飛躍

『ワールドクラスへの飛躍』とは、学術基盤を豊かにし、教育研究レベルの一層の向上を図ることにより、グローバル社会を牽引する卓越した教育・研究を行う、世界から尊敬される大学になることを意味します。

教育面では、「グローバルリーダー育成プログラム」を通して、多数の学生諸君を世界に送り出し、新たな時代を担うリーダーとして活躍出来るように意識改革を促しています。また、海外の著名な大学と共同で国際的な視野を持つ学生を教育することを目的として一昨年、スピントロニクス研究分野からスタートした「国際共同大学院プログラム」は、今年は宇宙創成物理学とデータ科学の2分野が開講され、また一歩前進します。

一方、研究面では、国内外から優秀な若手研究者を招聘する「学際科学フロンティア研究所」や世界を牽引する第一級研究者が集う訪問滞在型研究センター「知のフォーラム」を開設し、本学の若手研究者にとって刺激に満ちた成長の機会を提供しています。

復興・新生の先導

本学は、東日本大震災の被災地の中心にある総合大学として、東北の復興はもとより社会の変革そのものを先導する大学でありたいと考えています。

一昨年3月に仙台で開催された国連防災世界会議は、震災直後に設置した全学組織「災害復興新生研究機構」のこれまでの取り組みを世界に向けて発信するとともに、大災害を経験した唯一とも言える総合大学の経験と知見を国際社会と共有し、国内外での防災・減災について貢献する重要な機会となりました。

政府・自治体・関係機関や企業等と連携しながらの8つのプロジェクト及びアクション100+も順調に進んでおり、成果は毎年3月の機構シンポジウム等様々な場面で還元されています。

青葉山新キャンパスの整備

東日本大震災から6年余が経過する中で、本学の建物や設備の復旧・整備が進み、教育・研究機能は震災前と同等のレベルまで回復しました。他方、青葉山新キャンパスでは、新しい研究所やセンターが順次整備され、本年4月に農学研究科が新キャンパスで教育・研究を開始したことで一段落となりました。ユニバーシティハウスや保育所などの福利厚生施設も間もなく整備される計画です。

また、一昨年開通した地下鉄東西線において、本学のキャンパスに関連して整備された4つの駅全てが仙台駅から10分圏内であることを考えると、複数のキャンパスを持つ大学としては我が国で一番コンパクトにまとまった大学と言えます。このことは、学生や教職員の利便性の向上だけでなく、一体感をもった大学運営に結びついていくものと期待しております。

これからの東北大学

2年前から始めている「社会にインパクトある研究」の議論は、今後の大学における研究がどのような理念のもとで実施されるべきかを考える良い機会を提供していると思います。多くの矛盾が露出し問題が山積しつつある現代社会において、大学は何か出来るのか、この時期に大学全体で議論することは大学の財産になると信じています。

今年は、里見ビジョンの仕上げの年となります。5年間の到達目標として設定した7つのビジョン、およびこれに基づく重点戦略、主要施策が具体化するよう、これまで実施してきた教育・研究・社会貢献・ガバナンス改革などを一層推進し、成果が見えるようにしなければいけません。また、本年6月には文部科学大臣から「指定国立大学法人」の認定を受けました。今後は、国際的な競争環境の中で国立大学改革の推進役としての役割も期待されていくこととなります。

これからも東北大学が果たすべき使命、取り組むべき活動を皆様にご理解いただきながら平和で公正な人類社会の発展に貢献していく所存です。

平成29年7月
東北大学総長 里見進